

# 比喩と言語理解<sup>1)</sup>

## — 言語表現と理解の接点について —

松 中 完 二

### 1. はじめに

比喩の研究は、言語の問題であると同時に心理学の問題でもある。なぜなら比喩という現象は、人間の認知構造において知覚された心象を、様々な言語的手法を用いて相手に伝え、理解させる現象だからである。そのため比喩の研究では、言語的手法を生み出すに至った発信者の心的な認知構造と、その投影である言語表現の形態が問題となる。そしてそれは受信者の心的な認知構造において発信者と同様に知覚され、理解される過程を言語表現と意味との連関で実現させる。

本研究では、認知意味論における中心的研究課題の一つである比喩による言語現象と意味理解について、今後、具体的な事例検証に入る準備段階的意味合いも込めて、比喩研究の歴史を鳥瞰的に眺めながら、認知言語学におけるメタファーの捉え方とその学問的土壌について紹介していく。

### 2. 比喩について

#### 2・1 比喩研究の流れ

比喩研究の歴史は、その流れを大きく三つの時期に分けることができる。一つ目は、その創成期に当たる、古代ギリシャ時代のAristotleに代表される修辞学の黎明期がそれに当たる。二つ目は20世紀に入ってからと言語哲学における比喩研究の時期であり、三つ目は1970年以降の記号論や言語学的側面からの研究である。特に1970年以降の研究の隆盛については目を見張るものがある。比喩研究のこうした隆盛には二つの契機が考えられる。第一の契機は、1970年代後半に盛んになった認知心理学の進展による。認知心理学の特徴は、人間の認知構造における意味の処理機構やそれを支える知識構造を解明する点にある。そのため認知心理学における比喩研究は、人間の行なう比喩処理を認知処理過程あるいは言語処理過程の枠組みに捉え、そこで意味を生成し、理解し得る人間の知識構造に着目し、その解明を目指した点で、従来の比喩研究に大きな進展をもたらしたのである。

そして第二の契機は、1980年代に始まった認知言語学の影響である。Lakoff and Johnsonによる共著*Metaphors We Live By* (1980) が、言語学における認知的視座での比喩研究の先駆けであるが、そこでLakoff and Johnsonは、比喩が我々の認識や概念構造を支えている点を強く主張した。また彼らは、研究対象として隠喩と直喩だけではなく、従来であればあまり取り上げられなかった換喩、提喩といった現象を細かく取り上げ、そのような認知構造を基にメタファー的写像やイメージ・スキーマといった認識とその言語表現化の問題を新たに提示した。その結果、彼らの研究は比喩研究を認知構造における概念研究、カテゴリー研究と結び付けることになった。

こうした流れを受けた比喩研究の中で特に重視されたのは、比喩を支える意味構造に関する研究とその解明であった。特にここでは、類似性、意味構造と言語表現化の連関性が研究の中心に置かれることとなる。なぜなら、この二つの問題は相互に深く結び付いており、人間の知識構造が比喩の理解可能性について果す役割りや制約は、人間の認知構造における言語の処理過程と意味の認識の双方においてなされる部分だからである<sup>2)</sup>。

言語は、人間が世界と関わる上での主要な手段の一つであり、言語表現が表わす概念は、人間の概念化から独立して切り離された世界の客観的属性を表わすものではなく、人間の認知作用との関連性の中で説明せざるを得ない。こうした考えを基盤に置き、意味を言語使用者の外的認識との関りの中で捉え、意味現象を人間の記憶や経験基盤に基づき、その解明を目指す意味研究である。Lakoff and Johnson (1980) をきっかけに、我々の日常言語とその意味認識に際して、比喩が大きく影響を及ぼしていることが広く認識されるようになった。とりわけ比喩による言語現象と意味理解は、認知意味論における中心的研究課題の一つである。認知科学では、意味現象を主にカテゴリーとメタファーという視点から捉え、“人間の五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験の反映”を支えている原理が、メタファー的な認知活動に立脚するものであるとの考えから、とりわけメタファーによる言語現象と意味理解は、認知意味論における中心的研究課題の一つとなっている<sup>3)</sup>。

## 2・2 「メタファー」の性質

「メタファー (metaphor : 隠喩)」とは、比喩の一種で、A is like B / A is as ~ as Bのような比喩形式を取る直喩 (simile) と対峙するもので、直接A is Bのような断定的な表現を用いることにより、Bが表わす意味内容をAに付加する表現形式のことである。例え

ば、“She is my lover. (彼女は私の恋人だ)” という字義的表現を “She is my sunshine. (彼女は私の太陽だ)” と表わすのがメタファーである。人間の言語活動においては、未知の領域の物事を既知の領域の物事に喩えることで、それらの二つの領域間に認識される、何らかの類似性によって未知の事物を理解するという言語現象が見られる。こうした類似性の連想による認識がメタファーである。メタファーは、瀬戸賢一 (1997<sup>a</sup>: 35) によれば、“世界を理解するための認識装置であり、同時に、世界を再構築するための知的方略 (ストラテジー) である” と定義されている。また「人生は航海である」という表現では、航海という表現に、それに伴う出発地点から到達地点までの長い紆余曲折と喜怒哀楽などが、生まれてから死ぬまでの人間の一生とそこで起きる様々な大小の出来事が重ねられることで、人生の大変さや生き抜くこと、そこでの成功の達成感や失敗の雪辱感などがより一層鮮明に理解されるのである。更に、男をオオカミと羊に例えることで、その性的あるいは性格的ニュアンスを含意することが可能である。その例として次の歌詞の下線部からは、どのような世界あるいは意味が認識されるであろうか。

“男はオオカミなのよ 気をつけなさい

年頃になったなら つつしみなさい

羊の顔していても 心の中は

オオカミが牙を剥く そういうものよ

この人だけは 大丈夫だなんて

うっかり信じたら ダメダメ ダメ ダメダメよ

S.O.S. S.O.S. ほらほら呼んでいるわ

今日もまた誰か 乙女のピンチ”

———— ピンクレディー「S.O.S.」

この下線部は、まず間違いなく性的な認識を喚起させるメタファーである。ここでは、「オオカミ」、「羊」という語が、本来の動物としてのオオカミの獐猛さや羊の大人しさを基に、それを人間の男の性向に喩えることで我々の認識を形作っている。そしてこうした認識を決定付けるのが、「年頃」、「つつしむ」、「乙女のピンチ」という性的な方向性を規定する関連性のある言葉である。他にも例えば、「彼女はカメレオンだ」という表現は、カメレオン本来の、環境に応じて体の色を変え、周囲と同調し、外敵から身を守る特質から、彼女の人間性が「八方美人」、「風見鶏」といった一様の認識を生む。しかし、「彼女はぬらりひよんだ」、「彼女はシイラだ」といった表現から我々が得る認識は一様でなく、

きわめて理解が困難かつ限定的、または特殊な場合に限られる。例えば「ぬらりひょん」からは、彼女が妖怪みたいなこの世の者とも思えない不美人の集団の代表格といった認識が考えられよう。一方「シイラ」からは、シイラが釣り上げるとすぐに体の色が変わるところから、交際前と交際後（あるいは結婚前と結婚後）でその性格がガラリと変わるとか、シイラが水面のゴミの陰に隠れて動くものにすぐに食いつくところから、彼女がつまらない男に簡単にひっかかるといった、半ば無理やりこじつけた解釈しか考えにくい。実際、この二つの表現は全くもって一般的ではないし、またこうした認識も共通のものではない。こうした、何をもって何に喩えるかという方向性は無限に拡張するものではなく、そこには何らかの制約が存在する。この問題については、ここでは紙幅の関係から今後の課題とするが、こうした制約と方向性に人間の価値観や普遍的認識という視点からメスを入れたのが、Lakoff and Johnson (1980) である。

こうした比喩的な言語表現が言語機能の全てを司るものではないとしても、多くの場合において、我々はこうした言語表現という知的方略を用いて、そこで構築される意味の世界、あるいはそこで指示される内容が何であるかを認識し、理解している。

メタファーは、本来は修辞学の研究対象として扱われるが、そこには意味論の問題も内包されている。ある語、ないしはある表現が二つ以上の意味を持つ場合、そこでの中心的役割を果す本義的意味は「中心的意味 (central meaning)」と呼ばれ、そこからの派生的な意味は「周辺的意味 (marginal meaning)」と呼ばれる。

言語学と認知心理学が融合し、人間の心理的側面から意味解釈という行為を解明しようとする学問分野を認知言語学と呼ぶ。そして特にそこでの意味研究を認知意味論と呼び表す。Lakoff and Johnson (1980) を契機に、我々の日常言語とその意味認識に際して、比喩が大きく影響を及ぼしていることが広く認識されるようになり、認知言語学の研究者を中心に、多義構造が比喩的な原理に基づいて形成されている点が、今日までに次々と明らかにされてきた。山梨正明 (2000: 4) の言葉を引用すれば、認知言語学は、

“日常言語の表現は、ミクロ・レベルからマクロ・レベルにいたるどのような要素であれ、認知主体が外部世界とインターアクトし、外部世界を解釈していくダイナミックな認知プロセスの反映として規定される。外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点との関連でさまざまな意味づけがなされる。また、このアプローチでは、言葉の世界には、人間の知性的な側面だけでなく、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験が反映されているという立場

をとる。”

という理念を掲げる。そしてこの理念の基に、日常の言語使用における多義認識の問題も、その語を用いる我々の視点との関連から説明が試みられることになる。認知科学では、多義現象を主にカテゴリーとメタファーという視点から捉え、“人間の五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験の反映”を支えている原理が、メタファー的な認知活動に立脚するものであるとの考えから、多義構造を解明しようとする。こうした流れは、Berlin & Kay (1969) による色彩語の研究、Rosch (1973<sup>a</sup>/1978<sup>a</sup>) による人間の認知とカテゴリーの相関の研究、Kay & MacDaniel (1978) による基本色彩用語の研究といった、一連の認知心理学での研究にその源流が見出される。そこでは、語（言葉）とその意味認識には、人間の生理的認知構造が強く関わりを持つという主張が行われていた。そうした問題を言語学的な見地から見据え直し、認知言語学という学問にまで昇華させたのが、Lakoff (1987) である<sup>4)</sup>。

またSweetser (1990 : 17-19.) は、

“[前 略] linguistic usages frequently reflect our inherently metaphorical understanding of many basic areas of our lives; that is, not merely language but cognition (hence language) operates metaphorically much of the time. [中 略] Metaphor operates between domains. [中 略] Studies of systematic metaphorical connections between domains are thus needed, in addition to local studies of relevant semantic contrasts, to help us understand what is a likely relationship between two senses. ([前 略] 言語の用法には、私たちの生活の多くの基本領域に関する本来的にメタファー的なとらえ方が反映されていることが多い。すなわち、言語だけでなく認知も（それゆえ言語も）、たえずメタファー的に作用しているのである。[中 略] メタファーは、領域と領域の間で作動するが、その作動範囲は実に広い。[中 略] したがって、2つの意義の間の信憑性のある関係とは何か、ということをも明らかにしようとするならば、示差的な意味対立を局所的に研究するだけでなく、領域と領域をつなぐ体系的なメタファー的つながりに関する研究も必要となってくる。)”

(澤田治美訳、2000 : 28-29.)

と述べ、意味の有契性と派生を支える原理がメタファーによって支えられていると指摘する。

メタファーに関するこれまでの研究を大別すると、「比喩説」と「相互作用説」の二つに分けられる。「比喩説」とは、類似性の表現である、“A is like B”のlikeが省略された

形の直喩であると考えられる立場である。一方「相互作用説」とは、喩えるものと喩えられるものが、その内容において、相互に作用し合うと考える立場である。しかし、いずれの立場も、メタファーの現象を専ら言語だけの問題として捉えるものであり、その点で人間の認識や概念構造といった部分からメタファーの現象が解明され得るものではない。ここでは、あくまで詩や文学作品といった芸術文における、修辞技法の問題といった観点からの研究しか成され得ないことになる。

そして、これら二つの立場に疑問を投げ掛けたのが、Lakoff and Johnsonである。二人はその共著である *Metaphors We Live By* (1980) の中で、メタファーが、言語活動のみならず、人間の思考や行動様式に至るまでの、日常生活の断片にまで深く浸透しており、人間の認知における概念体系の大部分がメタファー的要素によって成立していると説いた。そこでは認知的な立場から、メタファーの機能と表現が研究されることになる<sup>5)</sup>。

Lakoff and Johnson (1980) は、メタファーについて「構造のメタファー (Structural Metaphors)」、「方向づけのメタファー (Orientational Metaphors)」、「存在のメタファー (Ontological Metaphors)」、「容器のメタファー (Container Metaphors)」という四つの種類を設け、そこでの言語事実を次のように記述している。

### 3. 認知言語学におけるメタファーの位置付け

#### 3・1 構造のメタファー

「構造のメタファー (Structural Metaphors)」とは、ある概念が他の概念に基づいて、メタファーによって構造を付与される現象を指す。このことについて、Lakoff and Johnson (1980) は、次のように議論に関わる一連の表現が戦争、争いの概念で語られる事実を提示し、その認識を構造のメタファーとして捉えた。

“ARGUMENT IS WAR

〈議論は戦争である〉

Your claims are *indefensible*.

〈君の主張は守りようがない (= 弁護の余地がない)。〉

He *attacked every weak point* in my argument.

〈彼は私の議論の弱点をことごとく攻撃した。〉

His criticisms were *right on target*.

〈彼の批判は正しく的を得ていた。〉

I *demolished* his argument.

〈私は彼の議論を粉碎した。〉

I've never won an argument with him.

〈私は彼との議論に一度も勝ったことがない。〉

You disagree? Okay, *shoot!*

〈異論があるだと？よし、撃って (= 言って) みろよ!〉

If you use that strategy, he will *wipe you out*.

〈そんな戦法じゃ、彼にやられてしまうぞ。〉

He *shot down* all of my arguments.

〈彼は私の議論をすべて撃破 (= 論破) した。〉

重要なことは、われわれは単に戦争用語を用いて議論のことを語っているだけではないということである。議論には現実に勝ち負けがあり、議論の相手は敵とみなされ、相手の議論の立脚点 (= 陣地) を攻撃し、自分のそれを守る。優勢になったり、劣勢になったりする。戦略をたて、実行に移す。自分の議論の立脚点 (= 陣地) が守りきれないとわかれば、それを放棄して新たな戦線をしく。議論の中でわれわれが行うことの多くは、部分的ではあるが戦争という概念によって構造を与えられているのである。武力による戦闘は行われぬものの、言葉による戦闘が行われるのである。そのことは、攻撃とか防御、反撃といった議論の構造の中にあらわれている。「議論は戦争である」というメタファーが、こうした文化の中で生きているわれわれの日々の営みに構造を与えているメタファーのひとつであると筆者たちが言うのは、このような意味である。「議論は戦争である」というこのメタファーが議論をする時のわれわれの行動に構造を与えているというのは、まさにこのような意味にほかならない。[中 略]

メタファーによって成り立っている概念が、つまり「議論は戦争である」という概念が、われわれが議論をする際にとる行動やその行動の理解の仕方に (少なくとも部分的に) 構造を与えているとはどういう意味なのか、以上はそれを示すひとつの例である。メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである。議論は戦争の亜種ではない。議論と戦争はまったく別物である——前者は言葉の応酬であり、後者は武力による闘争である。それぞれ行われる行動も異っている。しかしながら、「議論」は部分的に「戦争」という観方によって成り立っており、またその観点に立って理解され、行われ、言及されているのである。「議論」という概念はメタファーによって構造を与えられているわけであり、実際の議論の場で行われる行動もメタファーによって構造を与えられている。したがって、「議論」に関する言語もメタファーから成る構造をもっているわけである。”

Lakoff, G. and Johnson, M. (1980 : 4-5.) / 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986 : 4-6.)

このように、メタファーを意味の認識構造の土台として捉え、人間の概念構造の大部分は、こうした構造のメタファーによって形成されていると言っても過言ではないとLakoff and Johnsonは締めくくっている。

### 3・2 方向づけのメタファー

「方向づけのメタファー (Orientational Metaphors)」とは、概念同士が互いに関係し合っ  
て全体的な概念体系を構成している場合を指す。これらは、大部分が上一下 (up-down)、内一外 (in-out)、前一後 (front-back)、着一離 (on-off)、深一浅 (deep-shallow)、中心一周辺 (central-peripheral) といった、空間の方向性を指し示す概念によって形成される。Lakoff and Johnsonは *Metaphors We Live By* において、William Nagy (1974) の行った「空間関連づけのメタファー」の、上下の方向づけにおけるメタファー認知の研究成果を次のように引用している。

“HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

〈楽しきは上、悲しきは下〉

I'm feeling *up*.

〈気分は上々だ。〉

That *boosted* my spirits.

〈それが私の元気を押し上げてくれた (=元気をかきたててくれた)。〉

My spirits *rose*.

〈元気が立ち昇ってきた (=元気がでてきた)。〉

You're in *high* spirits.

〈上機嫌だね。〉

Thinking about her always gives me a *lift*.

〈彼女のことを考えると胸が高鳴る。〉

I'm feeling *down*.

〈気持ちが沈んでいる。〉

I'm *depressed*.

〈落胆している。〉

He's really *low* these days.

〈彼は最近本当に沈んでいる。〉

I *fell* into a depression.

〈気持ちが落ち込んでしまった。〉



My spirits sank.

〈気持ちが沈み込んだ。〉

肉体上の基盤：悲しいことがあったり、気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢になり、元気はつらつとしている時はまっすぐな姿勢になれるのが普通である。”

Lakoff, G. and Johnson, M. (1980 : 15.) / 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986 : 19-20.)

Nagyはこの他にも、意識を上、無意識を下／健康と生命を上、病気と死を下／支配力があることを上、支配されることを下／多いものを上、少ないものを下／高い位を上、低い位を下／よいことを上、悪いことを下／徳行を上、悪行を下／理性的であることを上、感情的であることを下としてメタファー的に認識される言語表現を提示している。結論として言えることは、人間の認識構造には、肯定的な概念を上として捉え、否定的な概念を下として捉えた言語表現として表わす傾向があるということである。このような、語の周辺にまつわる感覚的な意味概念が、ここでは方向を表わすものであるため、「方向づけのメタファー」と呼ばれている。Lakoff and Johnsonはいかなるメタファーもその経験上の基盤から切り離して理解することは不可能であり、また切り離しては適切な表現ともなり得ないと考える。そして認知意味論においては、こうした、語が喚起させる経験上の基盤としての周辺の意味概念をどう捉えるかが、重要な姿勢となってくる。

### 3・3 存在のメタファー

「存在のメタファー (Ontological Metaphors)」とは、方向づけのメタファーではその概念理解に自ずと限界があるため、方向づけだけによる基盤よりも更に広範な理解の基盤として提示された枠組みである。ここでは自分の経験を物体や内容物といった観点から理解することで、その経験のある部分を取り出してそれを別個の存在物として取扱うことが可能であり、そうした物理的物体や内容物に関する経験から、より広範な理解の基盤を持つものである。そしてそれを可能にするのは、物理的な存在物や内容物の経験が基盤となって、感情、思想、活動、出来事、事件、社会現象等といった、境界が明らかでないような通常、物として捉えないような概念を存在物や内容物として捉えることである。Lakoff and Johnsonはここで、例えば、インフレを例に挙げて、その存在のメタファーとしての扱いを次のように提示する。

“INFLATION IS AN ENTITY

〈インフレはひとつの存在物である〉

*Inflation is lowering our standard of living.*

〈インフレがわれわれの生活水準を低下させている。〉

*If there's much more inflation, we'll never survive.*

〈インフレがもっと増大すれば、われわれは生き残れなくなる。〉

*We need to combat inflation.*

〈われわれはインフレと戦わなければならない。〉

*Inflation is backing us into a corner.*

〈インフレはわれわれを隅 (=窮地) に追い込んでいる。〉

*Inflation is taking its toll at the checkout counter and the gas pump.*

〈インフレはその代価を (スーパーマーケットの) 精算所やガソリンスタンドで徴収している。 (=インフレのつけはスーパーで買物をしたり、車にガソリンを入れる時に回ってくる。)>

*Buying land is the best way of dealing with inflation.*

〈土地を買うことがインフレに対抗する最良の方法である。〉

*Inflation makes me sick.*

〈インフレは私をむかむかさせる。〉”

Lakoff, G. and Johnson, M. (1980: 26.) / 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986: 38-39.)

このように、インフレを一つの存在物として捉え、それを数量化したり、識別したりと、広範な範囲にわたってその認識が行われているが、これを存在のメタファーとするのである。また、Lakoff and Johnsonは、人間の精神や心をも機械やもろい物体としての存在のメタファーとして捉え、それを証明するために次のような例文を用いて解説している。

“He broke down. 〈彼は故障した=参って しまった。〉	—————→	THE MIND IS A MACHINE 〈知力は機械である〉
He cracked up. 〈彼は砕けてしまった=気が 狂ってしまった。〉	—————→	THE MIND IS A BRITTLE OBJECT 〈精神はもろい物体である〉

この二つのメタファーはメンタルな経験の正確に同じ側面に焦点があわされているわけではない。機械がbreak down (故障) した時は、その働きが停止しただけである。もろい物体が砕けたら、その破片はばらばらに飛散する。そして、その結果おそろくなにか危険なことが起こるだろう。だから、たとえば、誰かが気が狂って粗暴に、あるいは凶暴に

なったとしたら、その時は“*He cracked up.*”と言えばぴったりするだろう。一方、誰かが心理的理由から無気力になってしまい、働けなくなってしまった場合には、“*He broke down.*”と言うのがいいだろう。”

Lakoff, G. and Johnson, M. (1980 : 28.) / 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986 : 43.)

このように、「存在のメタファー」は、通常、物として捉えられない対象物を物に例えることで、そこでの現象とそれを言い表す言語表現による認識との関係を明らかにすることが可能である。

### 3・4 容器のメタファー

「容器のメタファー (Container Metaphors)」とは、内と外という方向性の区別を認識するものである。Lakoff and Johnsonは、そこで容器と考えられる対象物に、「視界」、「土地領域」、「出来事・行為・活動・状態」があり、それらを容器と見なすことによって生じる言語表現とその認識の関連性を説く。

「視界」においては、自分の眼に映る物体を視界という容器の中に存在する内容物であると認識する。このメタファーは、視界の及ぶ範囲がその領域の境界を限定するという事実から発生している。

「土地領域」では部屋や家、森、土地といった境界を設け、それらを容器として見るが故に、「部屋の中に (外に)」、「開拓地の中に (外に)」、「森の中に (外に)」といった表現に見られるように、自分自身が持っている内と外という方向性を、表面によって境界を接している他の物理的物体に投影して認識するのである。

「出来事」では、人間の認識は、存在のメタファーを出来事や行為、活動や状態を理解する枠組みとして用いられ、出来事や行為は物体のメタファーとして、活動は内容物のメタファーとして、状態は容器のメタファーとしてそれぞれ概念化されるとし、そのことを、競争を取り上げ解説を試みている。例えば、競争を一つの出来事として見れば、そこには空間と時間の中に明確な境界を有している。従って競争を「容器としての物体」と見なし、その中に物体としての参加者があり、そこで引き起こされるスタートやフィニッシュといった出来事や、走るという活動が含まれており、それ故に以下の例に見られるような言語表現が可能になると示唆する。

「活動」は、諸々の活動やその行為を成り立たせている別の活動を盛る容器と見なされ

る。そのため、主体が行っているその活動の中に主体自身が入っていると見なしたメタファー的表現で表わすことが可能となる。Lakoff and Johnsonは、ここでは窓洗いという行為を基にして、窓洗いをを行う主体がその行為の中に入っているという表現を取り上げ、このことを例証している。

「状態」では、主体の置かれている状態を容器として捉え、その中に置かれている主体を内容物として捉えた言語表現が可能となる。

これらの例を、Lakoff and Johnson (1980) は以下のような文を挙げて提示する。

“〈視界〉

The ship is *coming into view*.

〈その船がだんだん視界の中に入ってきた。〉

I *have him in sight*.

〈私は彼を視界の中に持っている (=彼は私の見えるところにいる)。〉

I can't see him ——— the tree is *in the way*.

〈彼が見えない ——— その木がじゃまになっている〉

He's *out of sight* now.

〈彼は今視界の外にいる (=もう彼は見えない)。〉

That's *in the center of my field of vision*.

〈それは私の視界の中央にある。〉

There's *nothing in sight*.

〈視界の中にはなにもない (=なにも見えない)。〉

I can't get *all of the ship in sight* at once.

〈一時にすべての船を視界の中にとらえることはできない。〉

〈出来事：競争〉

Are you *in the race* on Sunday?

〈君は日曜の競技の中にはいるか (=競技に参加するか)。〉 ——— (競争は「容器としての物体」とみなされる。)

Are you *going to the race*?

〈競争に行くのかい。〉 ——— (競争は「物体」とみなされる。)

Did you see the race?

〈その競争を見ましたか。〉 ——— (競争は「物体」とみなされる。)

The *finish* of the race was really exciting.

〈その競争のフィニッシュには本当にわくわくした。〉 ——— (フィニッシュは「容

器としての物体」の中の「出来事としての物体」とみなされる。)

There was a lot of good running in the race.

〈その競争の中にはよいランニングがたくさんあった (=その競争では素晴らしいランニングがたっぷりと見られた)。〉 —— (ランニングは「容器」の中の「内容物」とみなされる。)

I couldn't do much sprinting until the end.

〈最後まであまり全力疾走できなかった。〉 —— (全力疾走は「内容物」とみなされる。)

Halfway into the race, I ran out of energy.

〈競争の中に半分はいったところで (=途中で) 精根尽きてしまった。〉 —— (競争は「容器としての物体」とみなされる。)

He's out of the race now.

〈彼は今、競争の外に出た (=競争から脱落した)。〉 —— (競争は「容器としての物体」とみなされる。)

〈活動〉

In washing the window, I splashed water all over the floor.

〈窓洗いの最中に、私は床いっぱい水をまき散らしてしまった。〉

How did Jerry get out of washing the windows?

〈どうやってジェリーは窓洗いから逃げだしたのか。〉

Outside of washing the windows, what else did you do?

〈窓洗いのほかに何をしたのかね。〉

How much window-washing as a profession?

〈どのくらい窓洗いをしたのかね。〉

How did you get into window-washing as a profession?

〈どういうわけで、専門の窓洗いの道にはいったのかね。〉

He's immersed in washing the windows right now.

〈彼は今、窓洗いに没入している。〉

I put a lot of energy into washing the windows.

〈窓洗いにずいぶんエネルギーを注ぎ込んだ。〉

I get a lot of satisfaction out of washing windows.

〈窓洗いから多くの満足を得る。〉

There is a lot of satisfaction in washing windows.

〈窓洗いには多くの満足がある。〉

〈状態〉

He's *in* love.

〈彼は恋愛中だ。〉

We're *out* of trouble now.

〈われわれはもめごとから外に出ている。(=もめごとはなくなった。〉

He's *coming out* of the coma.

〈昏睡状態から抜け出しかけている。〉

I'm *slowly getting into* shape.

〈体調がゆっくりととのいつつある。〉

He *entered* a state of euphoria.

〈彼は多幸症の状態に入った。〉

He *fell into* a depression.

〈彼は抑うつ状態に陥った。〉

He finally *emerged from* the catatonic state he had been in since the end of finals week.

〈彼は期末試験の週の終りからずっと落ち込んでいた緊張病の状態からようやく脱した。〉

Lakoff, G. and Johnson, M. (1980: 30-32.) / 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986: 46-49.)

また同様に、Lakoff (1987: 272.) は次のような例も提示する。

“Sample metaphors: The visual fields is understood as a container, e.g., things come come *into* and *go out of sight*. Personal relationships are also understood in terms of containers: one can be *trapped in a marriage* and *get out of it*. (メタファーの実例：視界は容器として理解される。例えば、事物は視界の中に入り (come into sight)、また視界の外に出る (go out of sight)。人間関係もまた、容器に基づいて理解される。人は結婚生活に閉じ込められ (trapped in a marriage)、またそこから解放される (get out of it) ことがあり得る。)”  
池上嘉彦他訳 (1993: 329.)

これらの例からも見られるように、我々は肉体を持った存在であり、肉体の外にある世界と肉体の内なる世界とを区別する境界を認識している。そして内と外という方向性を一つの容器に見立て、対象物をそこでの内容物として表わすことが可能となる。そこでは、我々自身が持っている内と外という方向性を、表面によって境界を接している他の物理的物体にも投影して考えることで、こうした容器のメタファーとして表わし、そこから意味

を抽出することが可能となるのである。これが「容器のメタファー」とされる枠組みである。容器のメタファーは、人間の身体的経験に基づき、それを認識の内と外に区別することで成立する概念である。そしてそうした認識を、ここでは容器に見立てて、その容器の外に出たものであるか、容器の中に入っているものであるか、とする見方に他ならない<sup>6)</sup>。

この点について、onとoutの多義性を引き合いに出しながら、その意味解釈について、McCagg (2004: 330-331) は次のような解説を試みる。

“onの意味は、英語の前置詞では色々に関連付いて広がりながら、放射状カテゴリーを形成する。onの中心的認識は、トラジェクターがランドマークの上に位置しながらも、互いが接着しているというイメージ・スキーマとして定義され得る。onのこうした中心的認識の例として、「本（トラジェクター）は机（ランドマーク）の上にある」という文があげられる。他の前置詞と同様に、onには関連し合った、いや、もっと正確に言うならば、中心的認識からの様々に「動機付けられた」多くの意味がある。例えば、そうした中心的認識は、「天井に電灯がある」といった文に見られるように、電灯というトラジェクターが天井というランドマークとの接着を表すような形でも広がりを見せる。このように、onの認識が抽象的な領域にまで拡張する例は、次の例文16-18にも見ることができる。

16. ライトをonの状態にしる [=つける]。

(Turn on the lights.)

17. 今夜テレビでは何がonされている [=放送されている] のか。

(What is on TV tonight?)

18. この事態はどのくらいonの状態にある [=続いている] のか。

(How long has this been going on?)

これらの文におけるonの意味は少しずつ異なっているが、あるものの生命力や機能や存在といった感覚が絶えず続いているという認識で類似する。onは上の文で見ると、goやcarryのような語と結び付くことで、状態の持続といった認識を生む。

outの分析については、Lindner (1982) が行なった研究が顕著であり、それは本文中の「燃え尽きる (burn out)」という表現におけるoutの意味を解明する際にも有効である。Lindnerは、抽象的な領域における存在が、視覚的、認知的、社会的という三つの接近法によって我々の認識を形成する「相互作用の領域 (zone of interaction)」という考えを提案している。興味深いことに、outは全く異なる二つのイメージ・スキーマ的理解として定義付けられる。一つには、トラジェクターが最初に存在している場所が、はっきりとしない容器の中として理解される場合である。「出現する (coming out)」とは、対象物が

我々の視覚や認知や社会的活動の領域に入り込んで来ることを意味する。従って、星が「出現する」際には、星が我々の視野に入ってくることで、我々は星を見ることができるようである。outのもう一つのイメージ・スキーマ的理解は、トラジェクターが最初は相互作用の領域内において存在し、最後にはその領域から出て、我々の見えないところに移動してしまうというものである。従って、電灯が「消える (go out)」と、我々は電灯の光を見ることも出来ないし、また、明かりを灯すという電灯の機能も続いていないことになる。一般的に言えば、対象物が相互作用の領域の外にある時には、それは存在や機能を停止していることになる。Lindner (1982: 315) では、「outとは、対象物の機能停止や操作不能、ないしは存在の消滅または活動停止への状態の変化を意味する」と述べられている。従って我々は、本来の機能を果たさない機械類に対して“out of order (故障中)”という表現を用い、死んで存在がなくなった動物を“die out (絶滅する)”と言い、流行の終わった商品を“out of time (時代遅れの)”と表現するのである。火が“burn out (燃え尽きる)”する時には、火が消えることを意味する。”

McCagg, P. (松中完二訳、2004: 330-331.)

#### 4. まとめにかえて

こうしたメタファーによる言語表現とその理解は、人間の基本的かつ普遍的な経験に根ざしていることを強く示唆する例に他ならない。また、メタファーの記述において認知言語学的な視座でなされた主張は、メタファーが概念を構成する性質を有し、言語表現とその意味認識の可能性を拓げる手段であることを如実に物語っている。

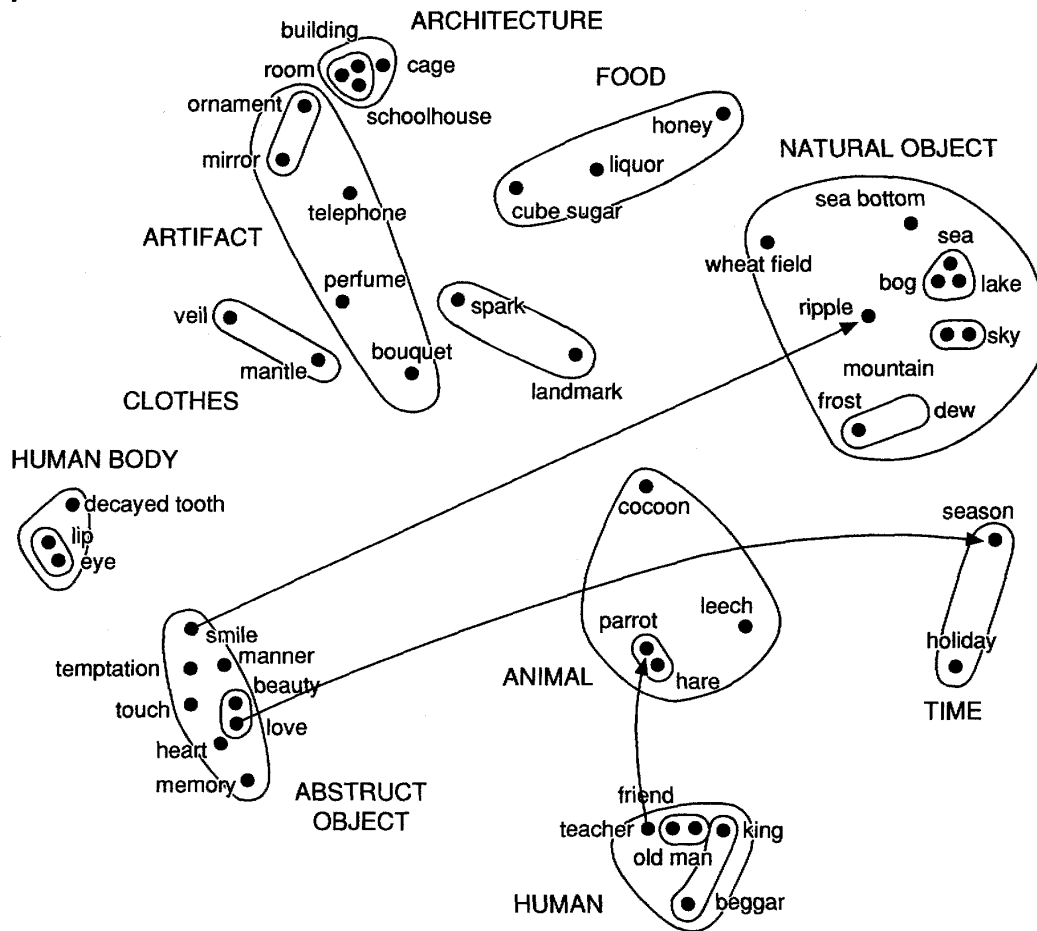
言語表現における意味認識の解明を図っていくためには、言語の形式的な研究だけでなく、こうした言語の運用的な側面を統合していく語用論の体系的な研究が必要となる。その上で、メタファーによる言語現象と、そこでの我々の認知構造の研究は、形式と運用のみならず認知と表現の接点を解明するための有効な枠組みを提供してくれる。

#### 注

- 1) 本論文は、敬愛大学経済文化研究所より2007年度個人研究（研究課題：「比喩と言語理解に関する認知的考察」）の助成を受けた研究成果の一部である。
- 2) そしてこうした流れを受けて、楠見 孝 (1995) は、連想頻度とスクリプト的意味という観点から比喩の構造を研究している。彼は独自のアンケート結果を基に、「カテゴリー的意味空間の構造と距離」と「比喩構成語の意味空間」を説明付け、ついで「愛」という語を取り上げ、その比喩と意味の理解の相関を図1～3のようにまとめている。



図1



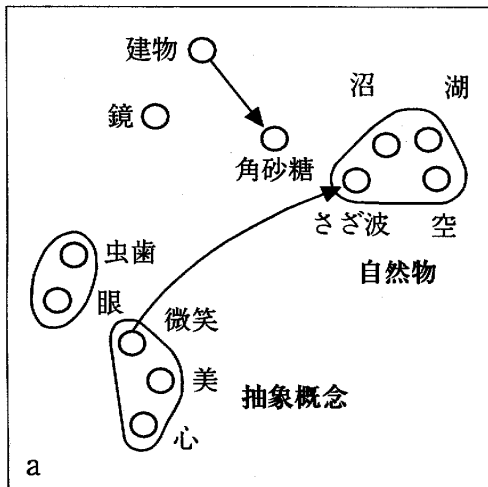
比喩構成語のカテゴリ的意味空間：分類データに基づく多次元尺度解析（2次元解）によって布置を求め、クラスタ分析によって、カテゴリを示す同心円を描いた。矢印は、比喩（主題→たとえる語）の例を示す。（Kusumi, 1987）

（楠見 孝, 1995 : 45.）

またこうした比喩の研究に、Tversky (1977) の研究がある。Tverskyの研究は、コントラスト・モデルと呼ばれ、特に比喩の認知心理学的研究の原点とされる。Tverskyは集合論を用いて比喩を形式的に分析する。彼は、比喩文を特徴集合で表現し、両者間の類似性認知を説明付ける。比喩に見られるような言語の類似性認知は、知覚、概念、学習等といった人間の認知構造における意味の処理過程を規定付ける要因の一つである。Tverskyの研究は、比喩の研究をこうした人間の認知処理過程と結び付ける道を開いたものである。また楠見はその考えを具体的に、「眼は湖だ」という比喩文を基に、その比喩性について図4のように説明付ける。

楠見のこうした図は、比喩文が人間の認知構造において関連性を持つものへの移行を表わすと同時に、認知構造における心象の言語表現化といった問題点をも指摘するものである。

図2

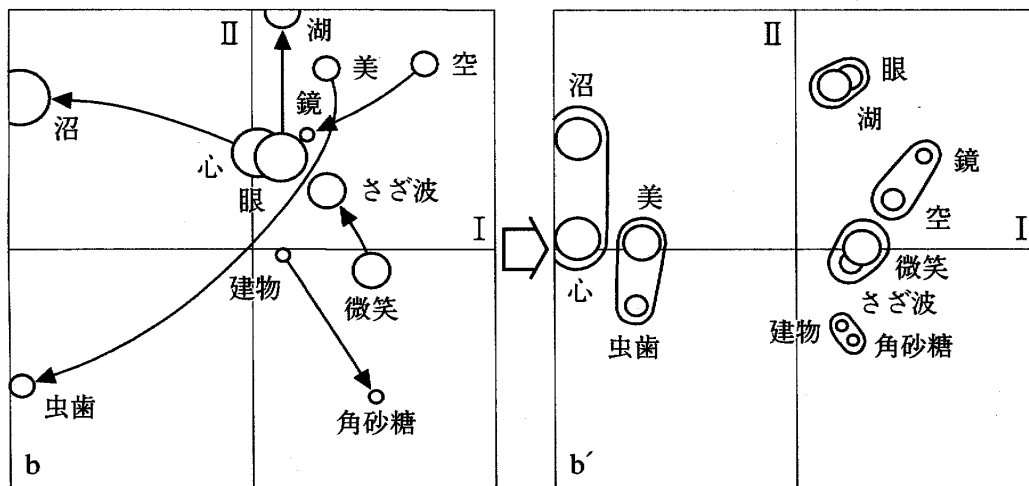


比喩構成語の意味空間：矢印は比喩例（主題→たとえる語）を示す。（楠見孝, 1989a）

a カテゴリの意味空間（囲みはクラスタ分析によって明らかにしたカテゴリを示す）

b 情緒・感覚的意味空間の初期状態（I軸は〔評価〕、II軸は〔力量性〕、○印の大きさはIII軸〔活動性〕を示す）

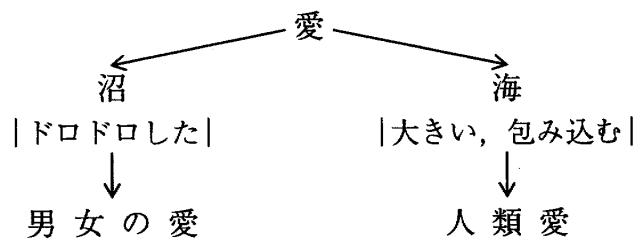
b' 情緒・感覚的意味空間の意味変化（囲みは比喩によって成立した局所空間を示す）



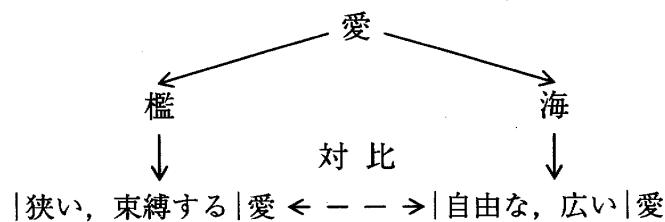
（楠見孝, 1995：99.）

図3

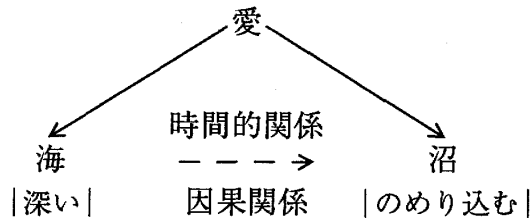
並列 一つの主題のもつ異なる側面、下位カテゴリとして結び付ける。



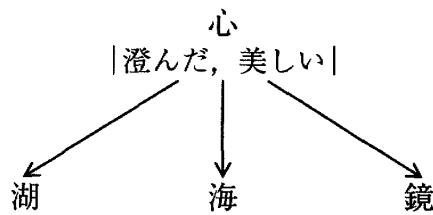
対比 正反対の特徴に注目して比較する。



連鎖 時間的關係，因果關係に基づいて結び付ける。



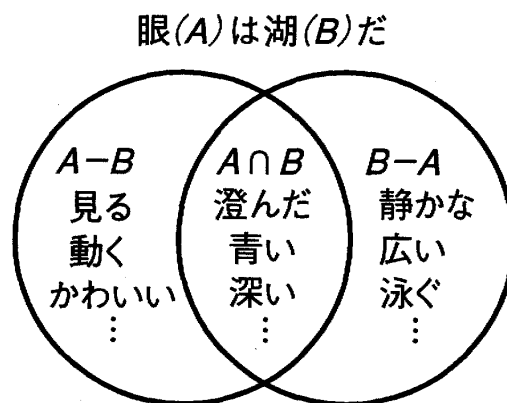
統合 共通の特徴やイメージを挙げて結び付ける。



複数の比喩の連結方法：主題“愛”に関する自由記述例

(楠見 孝, 1995 : 114.)

図4



隠喩を構成する語の特徴集合 (楠見, 1985)

類似性認知を集合論モデルに基づいて形式化し、比喩処理過程へと応用したものが、Tversky (1977) のコントラスト・モデルである。彼は、2つの対象を特徴集合で表現し、両者間の特徴対応過程として、類似性認知を説明した。すなわち、図2-1 (本稿では図136) のように、2つの対象a、bの特徴集合をA、Bとする。そして、対象aのbに対する類似性  $s(a,b)$  を、AとBの共有特徴集合 ( $A \cap B$ )、AのBに対する示唆特徴集合 ( $A - B$ )、BのAに対する示唆特徴集合 ( $B - A$ ) の測度の線形結合で表現した：

$$(a,b) = \theta f(A \cap B) - \alpha f(A - B) - \beta f(B - A) \quad (2.1)$$

ここで、 $f(X)$  は特徴集合  $X$  の顕著性 (saliency) を反映する測度である。顕著性の規定因は、強度 (対象自体の持つ信号/ノイズ比を増大させる要因) と標徴性 (diagnosticity: 対象を他の対象群から弁別する際に関わる要因) である。 $\theta$ 、 $\alpha$ 、 $\beta$  ( $\geq 0$ ) は重み付けのパラメタを示す。類似性の非対称性、すなわち、対象  $a$  の  $b$  に対する類似性と対象  $b$  の  $a$  に対する類似性が異なること ( $s(a,b) \neq s(b,a)$ ) は、 $\alpha > \beta$  によって説明できる。このモデルは、類似性を共有特徴集合と示唆特徴集合の対比で表現するため、コントラスト・モデルと呼ばれる。

(楠見 孝, 1995 : 29-31.)

- 3) ここでは、「比喩」と「メタファー」という術語に注意が必要である。一般には「比喩」の英訳が文字通り「メタファー (metaphor)」ということになるのだが、比喩研究という場合には、第一の黎明期におけるような、主に文学における修辞学の一環としての表現研究といった色合いで用いられる。一方言語学、特に認知言語学では、比喩のかわりにメタファーという術語を用いることが多いが、これは修辞学における表現研究といった色合いより更に広義に、言語表現とその理解という現象全般を指して用いられる。すなわち、言語表現とその理解を人間の心の問題として位置付け、類似する異なる現象の領域間を結び付ける「写像 (mapping)」による表現形式やその理解のことを、暗黙のうちに広義にメタファーと呼び表している。
- 4) Lakoff (1987) は、「女」、「火」、「危険な物」という全く別個の事象が、我々の認識においては同様のものとして位置付けられる傾向があり、そうした認識を支えている原理は何か、という部分にメタファーというメスを入れる。またLakoffは、日本語の「本」という類別詞を取り上げ、それが鉛筆やろうソクといった細長い固体物を数える場合のみならず、なぜホームランやサッカーのシュート、映画、武道の決め技、論文などといった抽象物の数を表す (例えば「ホームランを3本打った」や「論文を200本書いた」など) のにも適用が可能であるかという問題について、我々の認知構造から解明を試みる。こうした、我々が意味認識に際して、その根本的な部分で共有し、そのカテゴリーの成員として最も典型的な意味認識を、認知言語学では往々にして“プロトタイプ”と呼び表す。
- 5) この問題は、Lakoff (1987 : 104-114) に端を発する。Lakoffはそこで、日本語分類詞「一ホン」の使用対象とその使用について、イメージ・スキーマという観点から考察している。そしてLakoffのこうした指摘を発展させたものが、松本曜 (1991) である。
- 6) こうした現象は、認知言語学では「主体化 (subjectification)」と呼ばれる。我々が何らかの対象物を言語を用いて記述、表現しようとする場合には、通常、まずその記述対象を概念化することから始める。そのとき対象物は概念化における「客体 (object)」として捉え

られ、我々自身は概念化の「主体 (subject)」として捉えられる。一般的にはこのように主体と客体が分離した形で対象物が記述されるが、時としてその役割が曖昧になる場合がある。このように、本来客体であったものと主体とが融合される現象が「主体化」である。これは Langacker (1990 : 5-38) によって設けられた観念であるが、Langackerは、この主体化が語の意味の文法化のプロセスに関与する一つの要因であると考ええる。それゆえ、この主体化という視点は、言語の解釈の方向性にも視座を与える。そのような現象を「解釈の主体性・客体性」と呼ぶ。これは、事態を解釈する際の世界の区切り方として考えられる現象を表す。つまり、我々は記述する対象を自分とは完全に切り離されたものとして客体化して解釈したり、あるいは自分自身がその記述対象に取り込んだ形で主体的に解釈するやり方の二つを有しており、通常、そのどちらかで対象を言語によって記述、表現している。この場合、前者は「解釈の客体性」と呼ばれ、後者は「解釈の主体性」と呼ばれる。例えば、Langackerはこの現象を、以下の例文を用いて説明する。

“(1) a. We are approaching Tokyo.

(東京に近づいてきた。)

b. Tokyo is approaching.

(東京が近づいてきた。)

(2) a. We are passing through the telephone poles at 60 miles per hour.

(私たちは電柱の側を時速60マイルで通り過ぎて行っている。)

b. The telephone poles are rushing past at 60 miles per hour.

(電柱が時速60マイルで通り過ぎて行っている。)”

(Langacker, R. 1991 : 266.)

このように、実際に見えている状況を眼に映ったそのままの状況で表現すると、移動している主体が静的状態にあり、本来は動くはずのない静的物体が移動しているような表現で表すことが可能である。これは、発話者が、自分を解釈される場面の一部として客体化し得ず、主体自身は場面の外側に固定化され、そこから状況を視界の中に入れておくことで眼前の移り行く場面を把握していることを提示している。これは、発話者の視点、更には視線の動きが状況の解釈に重要な関わりを持ち、それが言語表現に反映されていることを意味している。そのため、認知言語学では、外界に解釈を加えていく側としての発話者の考慮する必要性を認識する。

## 参考文献

- 赤羽研三. 1998<sup>a</sup>. 『言葉と意味を考える [I] 隠喩とイメージ』夏目書房.
- 赤羽研三. 1998<sup>b</sup>. 『言葉と意味を考える [II] 詩とレトリック』夏目書房.
- Alverson, H. 1994. *Semantics and Experience : Universal Metaphors of Time in English, Mandarin, Hindi, and Sesotho*. Baltimore : The John Hopkins University Press.
- Allwood, J./Andersson, L. G./Dahl, O. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 尼ヶ崎 彬. 1982. 「言葉に宿る神」『理想』1982年12月号、pp.81-92. 理想社.
- 尼ヶ崎 彬. 1983. 『花鳥の使』勁草書房.
- 尼ヶ崎 彬. 1988. 『日本のレトリック』筑摩書房.
- 尼ヶ崎 彬. 1990. 『ことばと身体』勁草書房.
- Berlin, B. & Kay, P. 1969. *Basic Color Terms : Their Universality and Evolution*. Berkeley : University of California Press.
- 深田 智. 2003. 「イメージスキーマを介した言語意味論へのアプローチ」『日本認知言語学会論文集』第3巻、pp.343-346. 日本認知言語学会.
- 芳賀 純. 1976. 「言語学と心理学」『言語生活』1976年1月号、pp.87-93. 筑摩書房.
- 芳賀 純/小安増生編. 1990. 『メタファーの心理学』誠信書房.
- 浜田寿美男. 1995. 『意味から言葉へ』ミネルヴァ書房.
- Iida, Asako. 1996. Classification and Categorization : Semantic Properties of Japanese Classifier *Hon*. In *Tokyo University Linguistic Papers 15*. pp.113-141. Tokyo : Tokyo University.
- 飯田朝子. 1996. 「日本語分類辞の選定における形状の関与—「1本の毛糸」と「1玉の毛糸」をめぐって—」『日本言語学会第112回大会口頭発表資料』日本言語学会.
- 河上誓作編. 1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版.
- 川村義治. 1995. 「イカはどうして「一杯」と数えるのか—類別詞の認知意味論—」『金沢経済大学論集』第29巻、第1号、pp.37-57. 金沢経済大学.
- Kay, P. & MacDaniel, C. K. 1978. *The Linguistic Significance of the Meanings of Basic Level Color Terms*. In *Language 54*. pp.610-646. Baltimore : Waverly Press, Inc.
- Kövecses, Z. 1990. *Emotion Concepts*. Berlin : Springer-Verlag.
- Kövecses, Z. 1995. The 'container' metaphor of anger in English, Chinese, Japanese and Hungarian. In Radman, Z. ed. 1995. *From a Metaphorical Point of View : A Multidisciplinary Approach to the Cognitive Content of Metaphor*. pp.117-145. Berlin : Walter de Gruyter.
- Kövecses, Z. 2000. *Metaphor and Emotion : Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor : A Practical Introduction*. Oxford : Oxford University Press.
- Kövecses, Z./Radden, G. 1998. Metonymy : Developing a Cognitive Linguistic View. In *Cognitive Linguistics 9-1*. pp.37-77. Berlin : Mouton de Gruyter.
- 楠見 孝. 1985. 「比喩文における語句間の類似性—意味特徴の顕著性が比喩理解に及ぼす効果—」『心理学研究』第56巻、第5号、pp.269-276. 日本心理学会.

- 楠見 孝. 1987. 「比喩表現の理解過程—その認知心理学的分析—」表現学会編. 1987. 『表現研究』第46号、pp.1-12. 愛知淑徳大学国文学研究室.
- 楠見 孝. 1988. 「カテゴリとメタファ」『数理科学』1988年3月号、第297巻、pp.10-14. サイエンス社.
- 楠見 孝. 1990<sup>a</sup>. 「比喩理解の構造」芳賀 純/子安増生編. 1990. 『メタファーの心理学』pp.63-88. 誠信書房.
- 楠見 孝. 1990<sup>b</sup>. 「直観的推論のヒューリスティックスとしての比喩の機能」日本記号学会編. 1990. 『トランスフォーメーションの記号論』pp.197-208. 東海大学出版会.
- 楠見 孝. 1995. 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago : University of Chicago Press. (渡部昇一/楠瀬淳三/下谷和幸訳. 1986. 『レトリックと人生』大修館書店.)
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1981. The Metaphorical Structure of the Human Conceptual System. In Donald A. Norman ed. 1981. *Perspectives on Cognitive Science*. pp.193-206. Norwood, N. J. : Ablex Publishing Corporation and Lawrence Erlbaum Associates. (山梨正明訳. 1986. 「人間の概念体系における比喩構造」佐伯 胖篇. 1986. 『認知科学の基底』pp.35-56. 産業図書.)
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago : University of Chicago Press. (池上嘉彦/河上誓作他訳. 1993. 『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊国屋書店.)
- Langacker, R. W. 1990. "Subjectification", In *Cognitive Linguistics1* : pp.5-38, Berlin : Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.2 : Descriptive Application*. Stanford : Stanford University Press.
- Lindner, J. 1981. *A Lexico-Semantic Analysis of English Verb Particle Constructions with Out and Up*. Bloomington : Indiana University Linguistics Club.
- Lindner, J. 1982. What Goes Up Doesn't Necessarily Come Down : The Ins and Outs of Opposites. In *Papers from the Eighteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. pp.305-323. Chicago : Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- 松本 曜. 1991. 「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」『言語研究』第99号、pp.82-106. 日本言語学会.
- 松本 曜編. 2003. 『認知意味論』大修館書店.
- McCagg, P. 2004. *Conceptual Metaphor and Linguistic Comprehension*. (松中完二訳. 2004. 「概念メタファーと言語理解」) 論集編集委員会編. 2004. 『日本語教育学の視点』pp.321-335. 東京堂出版.
- 鍋島弘次朗. 2001. 「『悪に手を染める』：比喩的に価値領域を形成する諸概念」『言語文化学』第10巻、pp.115-131. 大阪大学言語文化学会.
- 鍋島弘次朗. 2002. 「Generic is Specificはメタファーか：慣用句の理解モデルによる検証」『日本認知言語学会論文集』第2巻、pp.182-192. 日本認知言語学会.
- 鍋島弘次朗. 2003. 「領域を結ぶのは何か—メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性—」『日本認知言語学会論文集』第3巻、pp.12-22. 日本認知言語学会.

- Nagy, W. E. 1974. *Figurative Patterns and Redundancy in the Lexicon*. Ph. D. Dissertation, Calif., San Diego : University of California at San Diego.
- 中石 実. 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 大堀 壽夫. 2002. 『認知言語学』東京大学出版会.
- Rosch, E. 1973<sup>a</sup>. On the Internal Structure of Perceptual and Semantic Categories. In Moore, T. ed. 1973. *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. pp.111-144. New York : Academic Press.
- Rosch, E. 1973<sup>b</sup>. Natural Categories. In *Cognitive Psychology* 4. pp.328-350. London, New York : Academic Press.
- Rosch, E. 1975. Cognitive Representations of Semantic Categories. In *Journal of Experimental Psychology : General* 104. pp.192-233. London : Academic Press.
- Rosch, E. 1977. Human Categorization. In Warren, N. ed. 1977. *Advances in Cross-Cultural Psychology*. Vol.1. pp.328-367. New York : Academic Press.
- Rosch, E. 1978<sup>a</sup>. "Principles in Categorization." In Neil, W. ed. 1978. *Studies in Cross-Cultural Psychology vol.1*. pp.1-49. London : Academic Press.
- Rosch, E. 1978<sup>b</sup>. Principles of Categorization. In Rosch, E./Lloyd, B. eds. 1978. *Cognition and Categorization*. pp.27-48. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum.
- 瀬戸賢一. 1986. 『レトリックの宇宙』海鳴社.
- 瀬戸賢一. 1988. 『レトリックの知—意味のアルケオロジーを求めて』新曜社.
- 瀬戸賢一. 1995<sup>a</sup>. 『メタファー思考』講談社.
- 瀬戸賢一. 1995<sup>b</sup>. 『空間のレトリック』海鳴社.
- 瀬戸賢一. 1997<sup>a</sup>. 『認識のレトリック』海鳴社.
- 瀬戸賢一. 1997<sup>b</sup>. 「拡大するメトニミー—認知言語学の問題点—」 *Kansai Linguistic Society* 17 (Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting)、pp.67-77. 関西言語学会.
- Seto, Ken-ichi. 1999. Distinguishing Metonymy from Synecdoche. In Panther, K. U./Radden, G. eds. 1999. *Metonymy in Language and Thought*. pp.91-120. Amsterdam : John Benjamins.
- 瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩』研究社.
- Shindo, Mika. 1998. An Analysis of Metaphorically Extended Concepts Based on Bodily Experience : A Case Study of Temperature Expressions (1). In *Papers in Linguistic Science No.4*. pp.29-54. Kyoto University.
- 進藤美佳. 2001. 「意味拡張とメタファー、メトニミー」『主体化と意味拡張のダイナミズム—ユニフィケーションに向けて—』(日本英語学会第19回大会ワークショップ原稿)
- 菅野盾樹. 1985. 『メタファーの記号論』勁草書房.
- 芝原宏治. 1982. 『レトリック論』丸善金沢出版.
- 杉本孝司. 1998. 『意味論2—認知意味論—』くろしお出版.
- 須沼詮太郎. 1979. 『現代英語のレトリック—隠喩とは何か—』荒竹出版.
- 鈴木宏昭. 1996. 『類似と思考』共立出版.
- 鈴木宏昭. 1999. 「人間の認知におけるカテゴリーと類似」『日本語学』1999年8月号、pp.69-78. 明治書院.



- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge, New York : Cambridge University Press. (澤田治美訳. 2000. 『認知意味論の展開 語源学から語用論まで』 研究社.)
- 多門靖容. 2003. 「古典語の隠喩、換喩、提喩と複合事象」『日本認知言語学会論文集』第3巻、pp.326-329. 日本認知言語学会.
- 田村健二／田村満喜枝編. 1986. 『こころの科学 9』 日本評論社.
- 田中穂積／元吉文男／山梨正明. 1983. 『言語理解』 東京大学出版会.
- 田中茂範. 1990. 『認知意味論』 三友社.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 研究社.
- Taylor, J. 1989. *Linguistic Categorization 2nd ed.* London, New York : Oxford University Press. (辻 幸夫訳. 1996. 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店.)
- 利沢行夫. 1985. 『戦略としての隠喩』 中教出版.
- 辻 幸夫編. 2003. 『認知言語学への招待』 大修館書店.
- Tversky, A. 1977. Features of Similarity. In *Psychological Review*. 84. pp.327-352. New York : Macmillan.
- 上野直樹／楠見 孝. 1987. 「メタファーと意味：主体—対象間の相互作用的观点から」『心理学評論』第30号、pp.281-303. 心理学評論刊行会.
- 上野義和編. 2002. 『認知意味論の諸相 身体性と空間の認識』 松柏社.
- Ungerer, F./Schmid, H. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London, New York : Longman. (池上嘉彦他訳. 1998. 『認知言語学入門』 大修館書店.)
- Werrner, H./Kaplan, B. 1963. *Symbol Formation*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Earlbaum. (柿崎祐一監訳. 1974. 『シンボルの形成』 ミネルヴァ書房.)
- 山鳥 重. 1998. 『ヒトはなぜことばを使えるか』 講談社現代新書.
- 山中桂一. 1972. 「言語とモデル」『言語』1972年7月号、pp.46-60. 大修館書店.
- 山中桂一. 1988. 「記号、シンボル、メタファー」『言語』1988年4月号、pp.54-60. 大修館書店.
- 山梨正明他. 1984<sup>a</sup>. 「意味と文脈」長尾 真編. 1984. 『講座現代の言語7 言語の機械処理』 pp.288-291. 三省堂.
- 山梨正明. 1984<sup>b</sup>. 「情報処理と意味規定」『理想』1984年10月号、pp.360-368. 理想社.
- 山梨正明. 1986. 「認知科学における意味論」『言語』1986年2月号、pp.56-61. 大修館書店.
- 山梨正明. 1987. 「文脈と言語理解の諸相」『日本語学』1987年6月号、pp.26-36. 大修館書店.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』 東京大学出版会.
- 山梨正明. 1992. 『推論と照応』 くろしお出版.
- 山梨正明. 1993. 「認知言語学—ことばと心のプロセス」『日本語要説』 pp.233-259. ひつじ書房.
- 山梨正明. 1995<sup>a</sup>. 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 山梨正明. 1995<sup>b</sup>. 「認知文法論のパーспекティヴ」『日本語学』1995年9月号、pp.73-91. 明治書院.
- 山梨正明. 1998. 「認知言語学の研究プログラム」『言語』1998年11月号、pp.20-29. 大修館書店.